

# 京都洛北修学院にみる癒心の風景

川崎 雅史

<sup>1</sup>正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 教授  
(〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail: kawasaki.masashi.7s@kyoto-u.ac.jp)

本稿は京都洛北にある修学院離宮を中心とした風致を形成する景観と眺望について、地勢的な視点から論考したものである。後水尾上皇により造営された修学院離宮の占地とその研ぎ澄まされたデザインについての考察を進めると、自然や都への癒心の思いが結実したものと考えることができる。さらに、離宮外位置する修学院と隣接する松ヶ崎、一乗寺の複数集落までを含めて俯瞰すると、一体性のある景域の広がりや有していることがわかる。修学院離宮、曼殊院、詩仙堂、鷺の森などをつなぐ山辺の散策道から見える風景は、見る人を雄大に包み込む地勢による一体的なコスモロジーを感じ取ることができる。そもそも洛北修学院は、権勢や都から離れた人々の心を癒やす場所であった。それは現在も続いている柔らかく優しい風景である。

キーワード: 風致, 修学院離宮, 洛北

## 1. 洛北の風致：癒心の風景

古来から京都の景観は、盆地を形成する三山とその麓である山辺の風致によって特徴づけられている。中心部より北東へ位置する比叡山の麓、修学院山や妙法山に広がる洛北地域の風致景観は、東山の連なりではあるが、以前の研究発表会にて示した八坂、清水界限の景観に対して、その骨格や様態が大きく異なる。この地は、古来から人知れず傷ついた心を持った人々や政治的に隠居した上皇や貴族、隠遁を願う文人達の住まいや社寺があった地域である。人々の観光や日常的な賑わいのある「遊興」の場所であった八坂・清水界限とは対照的な、言わばひっそりとした「癒心（ゆしん）」の場所である。

修学院村、一乗寺村の区域の多くは、散在する社寺と田畑を中心とした村落であり、今も生業の風景は神社の杜や小川の水みちと相まって、農村集落の文化的な景観が広がり、この洛北の地域の風致の基盤となっている。しかしながら、これだけでは終わらないのがこの修学院地区の景観の特殊性であろう。すなわち、この田園や杜のベースの上に特殊な個性を与える離宮の景観が存在しているからである。

## 2. 後水尾上皇による修学院離宮の造営と占地

近世の時代、長期にわたり上皇として院政をひき、大きな権力を持った後水尾上皇は、幕府に働きかけて5年をかけておよそ50万平米の超大なスケールをもつ修学院離宮（1655-1659造営）を造営した。同時代にルイ14世が造営したベルサイユ宮殿にも匹敵すると言われ、内部的にも外部的にも特化した景観をもつ世界的にも卓越した宮殿である。小高い離宮とその庭園からは、田園、山並み、都が一同に眺望できる。八十歳を超える年齢になるまで幕府の権勢に対抗し耐えてきた上皇が隠居した癒心の場所であり、その景色は京の都を我が手に抱く思いがあったものと推察できる。

本研究の目的の一つは、修学院離宮の地形的構成と景観の成り立ちを明らかにすることである。とくに、なぜこの修学院の場所が選ばれたのか、上皇が行った占地への考察を行った。後水尾上皇の離宮の敷地選定は、建設開始の十年前の1641年（寛永18年）から始まる。幕府との調整に時間を要したこともあろうが、京都の西部の衣笠山付近から、洛北の岩倉地区へと探索を繰り返し、長い時間をかけて現在の

修学院に占地を行っている。

筆者等は、過去に、この敷地選定の理由について、開放的な眺望が広がる山腹の地形的特徴があること、池泉式庭園が造成可能でありそれが俯瞰できる勾配地形であることなど一定の見方を研究報告した。

そこでは、谷筋であるため音羽川からの谷川や湧き水があり、年中通して集水ができることは舟遊びを楽しむための浴龍池を成立させる要件の一つであることがわかった。

当時どのような観点で検証していたかは明らかにできないが、決しておだやかではなかった音羽川の近隣にあって、防災的な観点からも一定の安全性を保證することができる敷地を結果的に選定したことは現代的な視点から考察を加えることができよう（図1参照）。

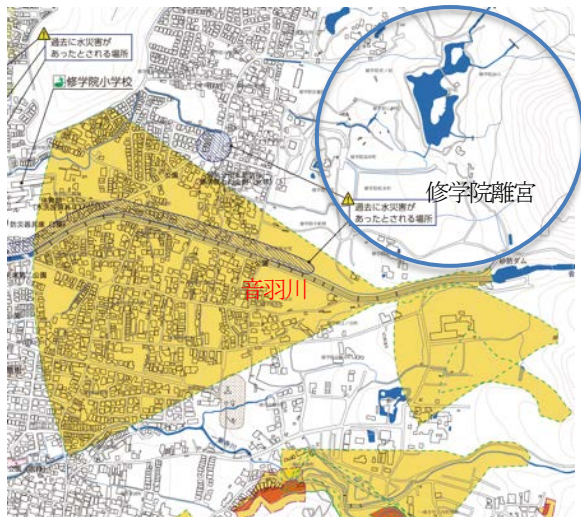


図1 土砂災害ハザードマップ（京都市）

そして上皇がここで見たかった風景は、京都の連山の最も高いシンボルとしての比叡山の足下の山腹に位置することをはじめ、地形構造とその固有な眺望景観を成立させる上で地形的な地勢上の特性について焦点を当てるとその概要が見えてこよう。筆者は、後水尾上皇は、雄大な自然の盆地系の掌握と、都の市街の両方への眺望を得ることにより、政治を退いた後も一応の権勢への心と癒心を目指したものと考えている。その点において、都が見えることは重要な視点場所であるが、決して見え過ぎてもいけない場所であり、都とも一定の距離感を持つことが重要と思われるからである。修学院のこの場所の地勢がその実現を十分に果たしたものと考えられる。

以上の占地の要件の考察にあたっては、このエリアには、近隣でも鷲の森神社周辺をはじめとした他

の敷地候補があるにもかかわらず、なぜこの場所が選ばれたのか比較考察することによって、後水尾上皇が丹念に長きにわたって占地した理由と上皇が目指した風景デザインへの考え方の一端を紐解けるものと考えている。

### 3. 離宮と洛北修学院の風景を創る地勢

#### (1) 離宮の地勢

離宮において目前にある田園の生業の風景と連山の雄大な眺望、そして上皇の心の置き所としての都が一同に眺望できる風景は、唯一修学院の地勢に基づいて実現できるものである。いくつかの庭園建築史における論評においてその建築の様式やディテールのあり方や庭園史については研究の蓄積がある<sup>2)</sup> <sup>3)</sup> <sup>4)</sup> 一方で、修学院の地勢の視点から評価した論考は稀少である。

修学院離宮は、下、中、上の3つの御茶屋とそれを結ぶ散策道によって構成されている。この敷地は、比叡山の裾野に位置し、複数の尾根と谷筋が集まっている50万平米規模の大きな敷地である。桂離宮が水平の移動に伴う景観変化を特徴とする離宮であるに対して、修学院離宮は上下方向の視点移動に伴う景観変化の特徴が大きい離宮である。

最初に、下御茶屋から山道を通って中御茶屋へと向かう。茶屋にある建築は、襖や飾り金具などのディテールには王朝美の頂点を極める要素が用いられているが、総じて簡素な山荘書院造りである。建築が山の自然に埋没しており、山道の延長上にある空間として構成されていることがわかる（図2参照）。



図2 御茶屋をつなぐ山道と寿月観

ここまでの視界は内へ向かって抑制され、身近な目の前にある山の自然と御茶屋のディテールを見せるの一体性のある道の空間が形成されている。

そして、中御茶屋から上御茶屋へ移動した時に視界に大きな変化が生じる。隣雲亭に着き、土間庇の仕上げの朱色の一二三石に目が止まって、そこから眼下には裾野に切り開いた浴龍池のある庭園と刈込堰堤が見え、そして、背景には、修学院、松ヶ崎の連山、岩倉や貴船に至る奥の北山の連山、さらに、市街地を挟んで、愛宕山など西山の連山への視界が一举に遠望まで開放されることになる。ここでは雄大な盆地の景色が広がり、洛北の奥まで含む京都の三山が最も見える場所になる（図3参照）。窮邃亭からの眺めも同様に独特の山容への開放を体験することができる。



図3 視界の開放—浴龍池と洛北連山（中島功撮影）

地形図（図4参照）に目を向けると、緩傾斜に田園が広がり、音羽川から分かれた谷川の水をせき止め約200m幅の堰堤による浴龍池の大刈込が高さ15m程度の高さであり、そこから急に山の勾配が大きくなる様子がわかる。筆者はこの15mの高低差、ここに連山への眺望の美しさの秘密が先ず仕組まれていると考えている。さらに、開放された離宮の風景が成立するためには、もっと大きな理由がこの場所のある特殊な地形の条件に隠されていると考えている。この点については後水尾天皇が癒心を願う風景として綿密に仕掛けたものと想定しているが、より詳細な分析を交えて発表する予定である。

以上のように、修学院離宮は、3つの茶屋を結ぶ道空間の行程において、自然へのまなざしにコントラストを与えて風景鑑賞のダイナミズムを伝えており、そのストーリーは世界にも例を見ない。高低差のみならず、この敷地の地勢がそのストーリーを創

っていることは実証的な事実である。

総じて、近世当時の武家社会にあったモニュメンタルな建築物が人為的な装飾の贅を施し、意匠が豪壮であったのに対抗して、自然へのまなざしを研ぎ澄ますことによって成就した後水尾上皇の離宮のデザインへの切れ味は凄まじかったものと考えられる。その意味では上皇の癒心ははるかに超越していたのかもしれない。

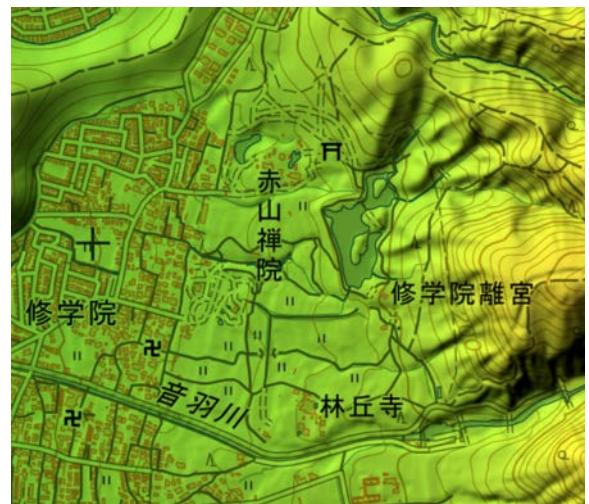


図4 修学院離宮の地形（国土地理院地図より）

## （2）洛北修学院における地勢のコスモロジー

次に、先述の離宮から見える風景と地形的特徴のみならず、離宮を含む修学院と隣接する松ヶ崎、一乗寺の複数集落までが、一体的な広がりを持つ景域的として把握することを試みる。

曼殊院、詩仙堂など山辺の散策道を歩くとそこから眺める風景は離宮ともよく似た地勢のコスモロジーを感じることができる。近世の絵図からもその構成を読み取ることが可能である（図5参照）。そこにおいても、山の地形や杜の存在が印象の主役となってくる。山や丘陵、杜によって囲まれた胎内的な空間と同時に、離宮と同様に微地形と緩傾斜勾配による高低差が相まって、盆地の特性としての山裾からの市街地、北山、西山の広域的な連山の眺望が、少なからず同時に成立している（図6参照）。

本稿のもう一つの目的はこの地域のもつ地勢の広がりを認識することであり、発表会において詳細を報告する予定である。



図5 古地図に見る修学院  
(元禄十四年寶測大絵図(1701年)京都地図集成(柏書房))



図7 個人の庭と修学院横山の借景



図6 修学院の風致一鷺の森と妙法山への眺め

#### 4. さいごに

発表会においては、地形分析や歴史絵図、フィールド体験による情報を基に、本稿で記した洛北修学院における風景の見方を解説する予定である。

後水尾上皇による先鋭的な感覚とはいえ、世界に卓越する庭園美や土木的な占地の技術を持ち、自然への固有なまなざしを修学院の地勢の場所で研ぎ澄ませた。修学院は、古来から権勢や都から離れた人々の心を癒やす場所であった。それは現在も続いている柔らかく優しい風景である。

そして、その風景は風土と地勢に根ざし、この地域の住む人々、訪れてくる人々の自己了解<sup>5)</sup>の支柱になり得ると思われる。

謝辞：東京大学の中井祐教授と景観研究室の皆様には、風土をより深く考察する場を与えて頂き、本稿着手の支えになりましたこと、深く感謝申し上げます。また、京都大学の谷川陸助教には、資料提供、風致に関わる有益な示唆を頂き、心より感謝いたします。

#### 参考文献

- 1) 北野琢人, 出村嘉史, 川崎雅史, 土地造成シミュレーションによる修学院離宮上御茶屋の敷地選定についての景観的考察, 景観・デザイン研究講演集, No. 3, pp. 314-318, 2007.
- 2) 村岡正, 太陽庭と家-公家・武将の庭, 平凡社, pp. 66-67, 1980.
- 3) 修学院離宮, 毎日新聞社, 1983.
- 4) 飯田智由起, 大川三雄, 著書「修学院離宮」にみる谷口吉郎の庭園観, 日本大学理工学部学術講演会予稿集, pp. 647-648, 2009.
- 5) 和辻哲郎, 風土, pp. 9-33, 岩波文庫, 2011.
- 6) 森蘊, 奈良国立文化財研究所学報, 修学院離宮の復元的研究, 養徳社 1954.